

信玄の母 大井夫人

「今宵はここまでにいたしとうございます」という台詞を覚えていきますか。20年程前に放映されたNHK大河ドラマ「武田信玄」での名台詞で、この年の流行語大賞を受賞しました。この台詞は番組では信玄の母、大井夫人のナレーションとして登場していました。

信玄が唯一頭が上がらなかったといわれる大井夫人、実は南アルプス市と深い関わりがあり、いくつもの伝承が残されています。



大井夫人の墓がある古長禅寺

武田信玄の父、信虎の頃の話です。信虎が甲斐国を統一支配しようとしていた頃、大井莊(南アルプス市南部、南巨摩郡北部)を領地とする大井信達(信虎の前に立ちはだかつていました。大井氏はもともと室町時代のはじめに武田氏から分かれた系統で信達の頃一大勢力を有します。

永正12(1515)年、武田信虎は大群を率いて大井氏の居城を攻めます。しかし城郭のまわりの深田に騎馬が足をとられ、大敗を喫してしまうのです。大井氏の城館は櫛形地区上野の椿城と伝わりますが、この戦いの既述などから、湿地にある甲西地区鮎沢の古長禅寺から古市場周辺にあったとも考えられています。

大井氏は文学愛好の家柄だったようで、鮎沢にある長禅寺(現古長禅寺)を一族の教育の場としており、大井夫人も漢籍等を学んだと伝わります。信虎と大井氏の抗争は翌永正13年にも引き続きますが、のちに和議が成立し、信虎は信達の娘をめとり政略結婚によって甲斐国内の安定を得ようとし

たのです。その娘というのが信玄の母となる大井夫人(1497~1552)です。

信虎24歳、夫人20歳の時に嫁ぎ、信虎が数々の戦を勝ち進む中、夫人は晴信(後の信玄)を産み、幼名を勝千代と名づけたと伝わります。夫人は晴信の姉(今川義元に嫁ぐ)、弟の信繁、信廉を産んだとされます。夫人は特に晴信の教育に心を尽くし、幼い晴信を連れ、躑躅ヶ崎の館から鮎沢にある長禅寺に足を運び、学問や兵学を学ばせたといわれます。幼年時代、信玄の学問の師は長禅寺の学僧岐秀禅師でした。

その後長禅寺は甲府の館の傍に移されたので、鮎沢の長禅寺を古長禅寺と称するようになったのですが、晴信の修学のため移したとも、母の逝去に際し晴信が移したとも伝わります。

大井夫人は第二人もここで学ばせており、教育熱心な母親だったようです。信玄が戦国武将のなかでも教養人であったことは、残された和歌や語録



大井夫人隊出陣に先立ち、墓参りを行う一行

によって明らかです。また3男信廉は絵画に優れており、父信虎、母大井夫人の肖像画等は有名です。こうした面での薫陶は母親である大井夫人の功績といわれています。

天文10(1541)年に信玄は父信虎を駿河に追放しました。このとき、大井夫人は43歳。剃髪し、躑躅ヶ崎館の北曲輪に住み御北様と呼ばれます。その後夫信虎と共に暮らすことなく、天文21(1552)年、病により55年の波乱万丈な人生を閉じることとなったのです。

古長禅寺の裏手には大井夫人のお墓が佇んでおり、今もその歴史を静かに伝えています。